

ポリクリを終えて

ポリクリを終えて

歯学科5年 嶋田 菜奈子

プロフェッショナルとは…。ここで語るには些か時期尚早なのでいつか出演した際に回すとして、今回はポリクリについて振り返ることとします。ポリクリとはポリクリニック (Policlinic [英]、Poliklinik [独]) の略で臨床予備実習のことを指します。5年生の5月から臨床実習が始まるまでの間行われ、各診療科をまわります。4年生までに行ってきた実習よりも実践的で、学生同士で麻酔を打ち合うこともありました。痛みを伴う実習の日は恐怖で朝も起きられないほど憂鬱でしたが、今考えると患者さんの立場に立つことができる良い体験だったと思います。

ポリクリではそれぞれの科でよく遭遇するシチュエーションを想定し、決められたシナリオ通りに診療を行う練習をしました。臨床実習が始まり、指示医の先生のもと患者さんの診療を行うようになると、患者さん毎に口腔内の状態が千差万別であることを痛感します。ポリクリでは学生同士、時には模型を使用して、歯周病なら歯周病だけ、う蝕ならう蝕だけ、義歯なら義歯だけを診ていましたが、実際の患者さんではこれら全てが1人の患者さんの口腔内に存在することがあります。患者さんを目の前に「ドラえもん!!」と叫びたくなる事もありました。そんなとき、いったん冷静になり記憶の四次元ポケットからポリクリで学習した基本知識を取り出してみると、基本の組み合わせと応用によって対処することができ、基本の大切さを実感しました。

一方で、シナリオ通りの練習だけでは不十分だったことに気付いた事もあります。そうです、医療面接です。医療面接はかつて問診と呼ばれていたもので、診

断の目処をつけるためのインタビューです。ポリクリでは患者さん役・先生役それぞれに大まかな台本があるため、話をしながら質問を考えることをせず、決められた質問をするだけで終わってしまいました。臨床実習で初めて医療面接を行った時、ポリクリと同様に患者さんに質問をしました。自分の中ではたくさん質問をし、いい仕事したなと満足していましたが、いざ診断をつけようとすると全く情報が足りていないことに気が付きました。なんということでしょう！先生方の医療面接は決められた質問だけでなく、似たような疾患を除外できるように患者さんの症状に合わせて質問を変えているではありませんか。それだけではありません。多くの疾患やその疾患の症状についての知識、さらに解剖学的な構造や生理的な仕組みなど多くの知識を動員して診断を導いていたのです。まさに匠の技だと感じると共に自分の知識不足を思い知らされました。

現在、臨床実習をしていて余裕がなくなる時や大変だと感じる事も多々あります。しかし今後振り返った時、全てが楽しかった思い出となり、ここでの経験は歯科医師となつてからの人生に役立つことでしょう。貴重な経験をさせていただいているという感謝の心を忘れず、“仕事の流儀”を語るその日に向け自己研鑽に努めます。



筆者：左端

ポリクリを終えて

歯学科5年 松崎 奈々香

この原稿を書いている今は、もうすぐセンター試験という時期です。自分が受けてからもう5年と時間の経つはやさに驚いています。新潟大学歯学部に入学してから5年生になるまでは基礎や臨床の講義、模型実習などがメインで、実習では作業が遅い私は毎回あくせくしながら一生懸命になってこなしていました。そうしてあっという間にずっと上の先輩方が着ていると思っていた緑衣（5、6年生の診療着）に自分が袖を通す学年となり、緊張と不安を抱えながら登院式をむかえポリクリが始まりました。

“ポリクリ”とは臨床予備病院実習のことで、新潟大学歯学部にある各科を1日から1週間かけてまわり、臨床を想定した実習を行います。私は歯学部に入るまでは歯科に10を越える数の科があることを知らず、改めて各科の特徴を知る良い機会でもありました。何より今まで授業で学んだ知識を土台に、初めて実際の人を相手にした実習で臨床と結びつけた理解ができ、新しく学ぶ事も多く濃密な実習でした。

口腔外科での採血や、麻酔科での点滴及び下顎孔伝達麻酔といった、学生同士で痛みや恐怖と戦った実習は特に印象に残っています。今までの実習は模型相手ばかりで一様に同じ方法でしたが、人が相手であると当たり前ですが腕の静脈も口の中の見え方も様々で、刺される以上に人に針を刺す時の方が責任を感じ、緊張したのを覚えて

います。

また、私の班のポリクリ初日は歯科総合診療部の“医療面接”でした。簡単に言うと患者さんの訴えやお話を聞くことです。一見、ただ話を聞くだけで良いのではないかと思っていましたが、実際に学生同士で練習すると意外と難しいものでした。例えば痛みがある場合、痛みの種類や程度によって歯の問題なのか、神経までのものか、痛み期間は、今までにその歯に歯科治療を受けたことがあるのか、治療をする上で出血しやすいなど問題となる事項はないか、など症状から頭にいくつかの診断を浮かべながら、こちらから質問をして診断を導き、治療法を選択していかなくてはなりません。必要な情報を聞き漏らさないように答えやすい開かれた質問、また逆に話の内容が多く、話題が逸れることがあれば大事なポイントに絞ってはいいいえで答えられるような閉ざされた質問などを使い分ける必要があったり、患者さんの気持ちに共感した言葉を入れることで話しやすい環境を作ったりと、臨床の間では歯科の知識だけではなく、質問力やコミュニケーション能力も歯科医師にとって大変重要な力であると学びました。

振り返るとポリクリは今まで学んだ知識を臨床実習へ結びつけ、臨床の間に出る責任を次第に形成していく橋渡しのような実習でした。今はまだ失敗と反省を繰り返しながらではありますが、恵まれた環境で実習を行わせていただけることに感謝しつつ、これから続く臨床実習で成長できるよう努力をし、国家試験を48期の皆で乗り越えていけたらと思います。



筆者：左から3番目